



名  
石  
神  
書

殘  
欠  
一  
本

服部文庫  
117  
65





白石先生紳書卷八

- 一 谷長右衛門和泉園松尾寺の物語の事
- 一 日光寺の庭樹倒れる事
- 一 本庄の地蔵系訪の事
- 一 本多佐治と祝祭の事 兼 家長 於 筑物河
- 一 懐神流助田村丸の物語の事
- 一 深見新右衛門中流の事
- 一 小瀬渡舟の事
- 一 先生後裔の事



- 一 葉を黄色のものなり
- 一 三宅後を以て文章を撰りて事
- 一 小田原記
- 一 安積を以て文章
- 一 松葉
- 一 檀越の事
- 一 小瀬後居に十の木の物語
- 一 日蓮の事
- 一 日蓮の事

- 一 菊地十右衛門の事
- 一 小幡板磨とよしの下女菊の物語
- 一 河内山祭の事
- 一 豆州三崎の事
- 一 相州石巻の社名
- 一 大坂の通人甲斐の子孫の事
- 一 五右衛門の事



白石先生紳書卷八



一谷長右衛門和泉園子羽谷松尾春よりあを共俗  
堂よりあを和泉法隆寺のたふをよめてる  
ま所ハむくのまはしり、加へて平教の一書也  
あをの首もと切ぎききとらふ三回にわたり  
なる、つらうの木の言き極の下ハしく  
器聽むしハ極を後、洞尾に、たふ  
つらう、あを、後、つらう、あを、つらう、あを、  
は、あを、つらう、あを、つらう、あを、つらう、あを、

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '和泉' and '法隆寺'.







寛政とせしめしむるニ御書ありておぼくもくもく  
了りし也 吾又予の舟子かいらくして生財を得  
て御石佛の背に御書えり成成月と云字をりて  
いかり也 ともか人なり 妹人のひまをりて  
いともいへりてくはれりてくはれりてくはれり  
人の心を動さるるなり 一也

一 今のお多きをいふ三流の歌多し 傳ふれぬ佐の家  
人の子孫御籠よりいふの海あり  
御籠文物 うや九 次々更守重 おとせ 流石屋の重之

朝在後(重基)を派のなむも 英弱年の流と云ふの丸の  
御着をよんりし事 文廟のいふ西丸に御夜  
御不御書を 憲廟の御隠居に御書よりあり  
むしのかをいふ除きしうらに 國表の子お  
て果さ御を 文廟の御時よ吹との御座を御くせし御  
て 相の御家なるよりいふ家か来しと云せりい  
古ま相の御書御書と云は佐座の相と云多  
佐家の御書と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書  
御着に御書 相と云ふ御書と云ふ御書と云ふ御書







田村丸の田村をよりしむの後の巻にコレはめえき  
とくに舞臺の曲りし油をりかす時ハ雷とるより  
なり故城<sup>後</sup>中よりせしに忽に震雷の響  
ありし事ありて城より外へ三三合浦ハチガ  
次とゆひよりありて城よりハ三三又板ガキとゆひて  
海登のてをりしに河よりえりしことあり

一 深見新海つ社文も人漳州の人高賢湖より  
薩州にあり止中ゆきと子と云一説より女子たに  
商人の姿にて薩州に百女石より流して我り

まよ十六の時にふ母のねがうとまじりて  
そのついでに母の父もく関つとてかまて  
目ありて薩州のついでに薩州にありて  
と船賊に海にありて一途のついでに  
て城よりありて時日本の人こよりありて  
て流るる流るる山にありて居りしに又ま  
と東のついでに三年もて母のついでに  
船よりありて流るる戸板に物とをせし  
時家ハ戸板に物とをせし商人の



日本口をつかきつゝ身をたれど  
いふに言はれざるはの時に薩州へ送つた  
その國の善母も死にたり父も死にたり母は  
所願は得ずしえいけふ物とて名をも一読と改めたり  
こゝ大抵一説と云ふに似たり男子一人を事ぶる  
後長崎の地をゆく成るる地を薩州へいり  
て言一説を説きせし長崎の地をゆくはけし人の  
正ににあり久安よりいへは薩州へいり  
ふと祀りての道原と云ふは立此して

うし四百あると云ふは長崎に男子一人を  
かまはる長き深見浦と云ふは久安の父  
ありしと云ふは久安の父ありしと云ふは  
かのさ護の子東御の家ついでり  
一説を効かす云ふし今しタカサと云ふ  
をね謀り日布、帰し流し薩州へ送り  
ゆふし桑田と云ふは流しにたれし時に武  
死して事ゆたり 武経桑田若あを  
とつひつけしそを一刀のちふにけり  
新右と云ふは事ゆたり



ろに上りて人の心はけりて又誠正誠を  
 といひしはたれも心のこころをさすもさす  
 又るにさるるこころをいひてさるるのこころは  
 一 小波後痛ふ言傳ふるのこころ言傳傳の謂れや  
 コモドとふ言傳ありしをあらに古の言傳傳の  
 ちりしもさるるこころをいひてさるるのこころは  
 又言傳のこころをいひてさるるのこころは  
 にやとさるる美ふコモドとふ言傳のこころは  
 くかむの人といひしこころをいひてさるるのこころは  
 こころをいひてさるるのこころをいひてさるるのこころは

むにさるるこころをいひてさるるのこころは  
 うめくさるるこころをいひてさるるのこころは  
 と神もさるるの制もさるるのこころは  
 一 後痛又ふエノキハ言傳の敷るこころは  
 一 後痛又ふ不若にクサ、よふ心のクサとふハ言傳  
 言傳自附方の下に揚氏簡傳をいひし耳患他痛或  
 紅腫肉張將經霜青管露在外將折者燒存性為未  
 傳入耳中とふ言傳のこころをいひてさるるのこころは  
 痛に殘拂宮前半露葉とふ言傳のこころをいひて  
 の言傳とふ言傳のこころをいひてさるるのこころは



ありをりあつ英地と云に品字集に雨露字を擇して又  
云輒ニ疲肉消骨露矣左傳に露其射よるなり即依に  
サレトツハニヤレトウヤアト云 露左外將折の右字を  
なるとる葉の外に多所のサレたりし即所謂クマナリ正  
字も也にして露ハ露多るとして左傳列傳と訂たり  
一 漢唐の如く未の字をノキトスルを本標  
一 何れもハ未トスルはヤトスルも多し一 白石にたぐ  
一 一しものまじりて吾々の教誨をほめし是ハひし  
小學のまじりにてなつたり即しるるはひし一 故あり

リとリカよりひまをまよりひササ菩薩ヨリ國虎のぬま  
あきううとあまぬ

一 我後唐にハ古語にも至詳なりぬ 古よりいひ傳  
しるものハ万葉歌に軍の字を釋してりハ教誨の  
詞にクサも戒のまことと云へたりハまをくのまのひ傳り家  
あつと謹うま後と云つ深とクサリト云も戒のま  
こしにやとらんに後唐ハクサメ一つをクサメくと  
アツクマハ事はよくまに足すも戒のまにひり  
いひふ又ハ漢字傳りぬとらんに古語のまをクサと  
いひしにまを大信ハハ義をまを漢字傳り大信











はもろくちのぬきこしりあるはたのらにせきと石蓮の  
池と大御堂の池とをくわしひふおのひたかにはる  
せむくおてそそめうさむしりけいそをひかへしけい  
らむしひりしちかふひふまをる男しよ早はまきしけいふ  
まけ男のひさのあ音の人ひて己う名をいれおぬはる  
人こしひたをと拂あてひ柳はひふおのひらとて事  
まをこしあひひてせめうさむしりてそそをひかへし  
まにまのひたはひかてはひてまの味せひかへしひらとて  
ひらとてまをくわしちかふはひてまう一果こいつきのま  
事實ちかむむ平秋のひさひひまをいれ我うのひらとて

しほしほしひ人柳の池をたきも籠をくわしたひはひはひ柳  
こしひまうひらとてまひひ人のまは二人をまぬらしてひ  
しひまをくわしちかふはひてまの味せひかへしひらとて  
一柳田系記よまよのれ上杉新島小峰のれをにひらの城を  
端をて石系へ追ふ石系は石系見事戦死したまを  
おひもたきしひ柳のひさひひまをいれまの味せひかへし  
まの府中へまをくわしちかふはひてまの味せひかへしひらとて  
まの柳田系記よまよのれ上杉新島小峰のれをにひらの城を  
地名も石橋をち平記よま氏武を柳戦まうちまけ  
柳田系記よまよのれ上杉新島小峰のれをにひらの城を



一 己亥五月晦日... 直江山城守兼續父曰通口方三衛門其事上杉景勝母掌

薪糧兼續美而折景勝悅而寵之老臣直江大和守死而無  
子景勝繼其家長而有材氣遂為景勝之重臣其報允長  
老各傳播于世觸撥東照宮之震怒兵端繭于此矣然嘗  
怪其各辭氣虽悖慢而飽滿沈壯無窒塞之累似曉文  
字者通見四家合政稱其有文學哉詩二句曰春一似吾  
吾似一洛陽城裏背花歸一變知味頗能詩者因考未  
館必纂詩集得詩二首其一則織女惜別曰二星何限

隔年逢今夜連林散鬱胸私語未終先灑淚合歡枕下  
五更鐘勿語洗刷殆非鹿人口气及閱羅山先生五臣注文  
選跋如兼續之所梓行於是方信其注意文字合攷之  
語不妄也兼續頗有將略惜其肆意及噬寇初山形陷細  
屋攻長谷堂方最上茂光相持關原之敗旋師于會津  
皆有法度時人稱之唯上山之戰不用上泉立水之言使之  
憤激致死不厭人望耳總之兼續罪魁也當方逆黨同  
誅夷而東照宮包荒之量赦而不問及難波搆兵志貴  
野之戰出奇制勝虽功不贖罪而竭力戎事于戈既戢  
能以文籍自娛當武健將亦必罕有偶因論詩及之



書生の時、時勢を去るものなるに、  
詩を去るなり、故に、  
漢、孫、方、歌、り、の、詩、材、り、し、  
一、地、象、を、去、り、  
是、年、己、亥、と、り、三、三、年、前、に、死、せ、り、  
一、己、亥、の、乙、未、の、初、に、  
公、方、の、次、は、始、り、  
公、方、の、次、は、始、り、  
公、方、の、次、は、始、り、

是、時、は、ぬ、り、を、  
何、の、學、士、父、子、の、  
お、り、に、我、も、  
後、に、  
此、文、の、目、と、同、し、



けりしとらひかひしなきははははの女していりまじき  
昔地着女史よふとあはれ仰そ侍ふりしせし父の宰相の侍  
中りしと宰相おとそ来り侍に問はれりしと答へたるはけ  
檀紙よふとあはれまゝゑりし徳訓は来にも穢はるる同  
檀帛よふとあはれしと京の公方の次小娘しよふとあはれ  
らんりふりまじきけ紙のよふと正式書察にけりしと  
きりまじきと悲皮と者無しとさきと悲皮と印  
かのとあはれしとあはれしと悲皮と者無しの字を以てし  
諸ふと貴工のよふにもあはれ典宗察のよふにも印本に悲  
皮素はるよふとあはれし樹の皮とりしとさきとあはれしと素はる

名石檀和名しとまりつ俗タシノ木よふとあはれし順の和名おにんし  
との俗はタシノ木よふとあはれしと素はる紙とタシノ木よふ  
俗にいひつゝあはれし後は檀紙よふとあはれしと素はる  
豊州に源氏にさきの紙よふと檀紙のよふとあはれし檀帛  
ハ陸奥よふとあはれし俗は引合よふとあはれし男女のむと  
通れ玉章にけ紙と引合よふとあはれし引合よふとあはれし檀  
紙に大小のあはれしとあはれしと引合よふとあはれしとあはれし  
藤垣よふとあはれしとあはれしと檀帛しよふとあはれしとあはれし  
はとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしと  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしと







とふふのきく檀城にも川々よあるはつとふをさし  
すゆて司のなるをし川合よりふを必く檀城に  
限るはさあふ

一己亥七月の初小瀬江流すある色にけふ取らむむ  
くに信濃江をさきし時該訪部中にけふの木の香蘭  
ひしはさるるもの土人よりまや長しぬる時ははと樹  
ともあまにさるる枝を折るはつとさるのさるはは  
を剥て糸をさしてさしぬるをさるのさるをさつひきし  
布さるるの押あふはふ又攪るはさるのさるにさるるを  
ハスはと樹上つはさるるをさるるさるる大やふ振るるの

ふささの付糸とさるの候しよふ樹葉ハハのまよふのさる  
はさるるさるるさるるさるるの樹葉をさるる我はさる  
ししはの色白く駁なりぬるさるるさるるのさるる  
てさまに織文の習とのり

一又後者ふけをさるる事ゆしにさるる糸はさるる白り  
はは敵山はさるる飯家の相禅院にける侍をさるる師のさ  
祇の物二をさるるさるる板倉内務をさるるのさるるはは  
の備の糸へかすしぬるはは海堂へかすしぬる二人と教書  
一人と大書の二つさるるさるるのさるるにさるるさるる  
一天井はさるるのさるるをさるるさるるさるるさるる



































一 此死したる所の菊の葉にありしと云ふしこらるるの如く  
のそとを借りてまじりいづく所か事と云ふ  
某りある事と云ふものあり申生の厲の車るは  
し事を申生しつゝの車るは鬼魄也何と云ふ  
こと古人の言ひまの理ある事ことかりし申生  
の車るは子なるのしゝ実の車るといふ  
るはしつゝの申生の魂の言ふ事ある  
しるはしつゝの申生の魂の言ふ事ある  
人のえしつゝの申生の魂の言ふ事ある  
はしつゝの申生の魂の言ふ事ある

一 このまじりつゝの申生の魂の言ふ事ある  
はしつゝの申生の魂の言ふ事ある  
はしつゝの申生の魂の言ふ事ある  
はしつゝの申生の魂の言ふ事ある  
はしつゝの申生の魂の言ふ事ある

一 胡蒙某想州人河間某言河間姓秦氏也盖秦氏行于吾國之起  
於人王世欽明帝也朝一夕帝夢有神童言曰我身是秦始皇也  
請托此地帝世見異焉当是時大和州有洪水之變而初瀬川大  
漲矣有大雍隨流而下土人問之視則有一男子身體如王州  
秦之帝曰而夢見者也斯人神奉育之賜姓曰秦名曰河勝



生有才智年總十五拜為大臣歷歷五朝迨于推古時豐聰太子  
監國事河勝為之余津矣後人此邦游于難波之浦乘一小舟  
任風之吹之舟着奮易之岸國人聚觀以非常人而靈感  
甚夥竟立祠奉號曰大荒明神至今祭焉

一 けり十月京の本下ちあつて一向にけりひをかこひて  
神をいふにはけり一かゆりけるにち社にふりて  
一 事やあつて向ひにけりかこひてふりて  
あ社の社に四本の袍をけり紫の色にけりけりけりその袍  
の色は紫けりかこひてけりけりけりけりけりけりけり  
他方けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

一 又けり書けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
あつてけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
おは古にもスサの山にけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

一 己亥若相家の石子の社をけりけりけりけりけりけりけり  
にありてけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
大山の峰にありて山上にありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありてありてありて







神社園部、即入部の付左記ある在所四所々の由多  
新名地にもひたつ山田系にありし所も三浦系の名を司つた  
園八家の南人のレニヤクをわしたくは所にはありしは名を  
レニヤク運立の事を所自考ありては元の歌を  
二男にゆける所にも古名とて考へし路程しその  
一説はゆけるゆへに古名にむこころに古名を考へ  
はる(一)

一説はゆけるゆへに古名にむこころに古名を考へ  
はる(一)





